

JOCV千葉OB会報

2019年8月
No. 96

夏号

1. 会長挨拶

今年度より、浜田眞一前会長より会長の任を引き継ぎました、三次恵美子と申します。(一昨年まで、旧姓の「鳥飼」で活動しておりましたが、会社を辞めて新しい活動を始めるにあたって、本名を名乗ることにしています。以前からお付き合いさせていただいている皆様には呼びやすい名前で呼んでいただければと思います。) 長年、JICA や青年海外協力隊事業に携わってこれ、精力的に活動されてきた浜田前会長の後任ということで、少なからずのプレッシャーがありますが、浜田前会長が盛り上げてくださった当 OB 会の勢いを落とさずに、会員の皆さまと協力しながら活動をすすめていければと思っております。

昨年の会報でも記事を執筆させていただきましたが、私は 2018 年 1 月より、10 年近く勤務した会社を辞め、千葉県御宿町で地域おこし協力隊として活動しています。(地域おこし協力隊とは：人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材に地域協力活動を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした制度)。“青年海外協力隊”と“地域おこし協力隊”、同じ「協力隊」という文字がつきますが、制度も実態も大きく異なります。ただ、「現地に溶け込み、地域の発展に寄与する」という原則は同じで、JOCV で必要とされた“地域の課題を発掘し、解決する能力”、“現地に溶け込み、周囲の人を巻き込む能力”は地域おこし協力隊にも求められるものだと感じています。そして、それは、地域活性化に関する活動全般に言えることだと思います。これまでも、御宿町において、グローバルキッチン(各国料理紹介)の開催、JOCA ブロック会議の開催など、当 OB 会も絡めた活動をさせていただきました。地方で国際交流活動を広げているということで、「地域おこし協力隊サミット」や「中山間地域フォーラム」において事例紹介もさせていただきました。今後も当 OB 会を通して、千葉の過疎地域を活性化させる活動ができればと考えています。

さて、今年の 6 月、協力隊の応募者が半減というショッ

キングなニュースがありました。記事によると、2010 年には 4000 人の応募があったのが、2018 年には 2000 人にまで落ち込んでいるとのこと。広報の問題、近年の若者の内向き志向、そもそもの若者人口の減少、人手不足による売り手市場など、数々の原因が考えられますが、このまま減少が続けば、近い将来に協力隊事業の存続は困難となるでしょう。協力隊事業は賛否両論ありますが、派遣国と築いてきた信頼関係や支援体制を継続させることはもちろん、現場での行動力を伴う国際人材の育成のためにも、今後も継続されることを願っています。とりわけ、格差社会となっている昨今、留学を経験できる若者は一握りだけです。協力隊は誰にも等しく与えられる、海外経験を積める絶好の機会だと思っています。

本年度より「青年海外協力隊」「シニア海外ボランティア」の年齢の区別がなくなり、「JICA 海外協力隊」として統一されました。これにより、年齢にかかわらず熱意のある人が応募できるようになり、応募者数も増えるでしょうか。それとも、これに伴う待遇の変更により、さらに減少となるでしょうか。当 OB 会も、時代の変化や協力隊事業の改変に伴い、活動を見直す必要があるのだと思います。簡単には海外に出られなかった時代、青年海外協力隊は憧れの存在でしたが、私が参加した 15 年前にはすでにそのような存在ではなくなっていました。当 OB 会で協力隊に関する情報の発信および、価値のある活動をしていくことで、協力隊の価値を高め、この逆風に立ち向かっていきましょう！

青年海外協力隊千葉 OB 会

会長 三次 恵美子

(平成 15 年度 1 次隊、マーシャル諸島)



【御宿ビーチにて OB 会メンバーと撮影】

目次

1. 新会長挨拶
2. 報告事項
 - 1) 通常総会
 - 2) JOCA 評議員会、社員総会
 - 3) 大使村まつり
3. 現地活動レポート（派遣中隊員寄稿）

2018-2	古殿 貴大	ウガンダ	コミュニティ開発	市川市
2018-2	林 麻里奈	フィリピン	観光	印西市
2018-1	齋藤 一輝	インド	コミュニティ開発	市川市
2018-2	長野 峻典	東ティモール	体育	松戸市
2018-1	野地 祐輔	カメルーン	コミュニティ開発	大網白里市
2018-1	川崎 悠	ペルー	観光	鋸南町
2018-1	五十嵐 みのり	フィジー	青少年活動	八千代市
2018-1	工藤 智浩	セネガル	小学校教育	松戸市
2018-2	渡邊 俊平	マラウイ	コンピュータ技術	佐倉市
2018-1	宮森 大輔	マダガスカル	コミュニティ開発	流山市
2018-1	佐々木 麻弥	ミクロネシア	小学校教育	柏市
2018-2	永井 寛朗	ザンビア	PC インストラクター	佐倉市
2018-2	田中 上葉	ベナン	野菜栽培	野田市
2018-2	高瀬 紬	パラオ	体育	佐倉市
2018-1	榎山 万葉	ウガンダ	コミュニティ開発	船橋市
2018-1	窪田 尚美	スリランカ	小学校教育	千葉市
2018-1	森川 万里	ネパール	コミュニティ開発	野田市
2018-1	長澤 沙希	カメルーン	小学校教育	四街道市
2018-1	西田 いずみ	マレーシア	障害児・者支援	千葉市
4. 今後の活動予定
 - 1) グローバルフェスタ
 - 2) 新隊員派遣壮行会、帰国隊員慰労会
5. 編集後記 ☆お知らせ

2. 報告事項

1) 通常総会について

4月13日（土）、平成31年度通常総会を開催しました。場所はいつもの浦安市国際センターで開催され、出席者は前年と同じ20名でした。

議事は平成30年度活動報告から始まり、30年度会計報告、31年度活動計画および予算（案）が審議され、最後に役員の改選がありました。

平成30年度活動報告では、協力隊ナビを毎月第4土曜日に

実施している他、協力隊まつり、国際フェスタ CHIBA などでも応募相談を開いている旨の報告がありました。そのような活動のおかげでしょうか、千葉県で毎年5名前後は合格者を出しているとのことでした。

また平成30年度のJOCA 関東ブロック会議は千葉県が幹事で御宿町にて行われました。地元御宿町で地域おこし協力隊として活動している三次恵美子 OG をはじめとした多数の協力もあって、ブロック会議が成功裏に終わり、JOCA はじめ参加し

た各県代表者から高い評価を得ることができたとの報告がありました。

平成30年度の会計ですが3万円弱の黒字となり、翌年度に繰り越しています。

平成31年度の活動計画・予算については30年度と大きく変わるところはありませんが、訓練や派遣が年4回から3回に変更、ボランティア制度が4区分から6区分に変更となるなど、協力隊を取り巻く環境は年々変化しています。

役員の改選では、長年千葉OB会を牽引してこられた浜田眞一会長が勇退され、後任として三次恵美子新会長が選出されました。浜田会長、今までお疲れ様でした。

総会終了後は恒例となっている懇親会が開催されました。新浦安駅前のショッピングモール内の居酒屋に15人以上が集い、楽しい語らいの場となりました。

2) JOCA 評議員会、社員総会について

6月22日(土)、長野県駒ヶ根市にてJOCA評議会並びに社員総会が開催されました。評議会の主な議題は各地域のOV会の活動報告とOV会について、そして共同事業費等の運用変更案でした。OV会の活動は地域によって様々で、大学やラジオ局と協力して国際社会への関心を高める取り組みを行っているところもありました。OV会の活動もJICAで途上国に派遣されていた時と同様に、活動する分野や場所に限界を設けず、人との繋がりや柔軟な発想と実行力があることも大切だと感じました。OV会については、現在の新規入会申請条件が「関係するOVの過半数の同意」という達成に困難の伴う現状を踏まえて、新規入会申請条件の変更と審査プロセスが周知されました。審査については、組織のサイズや地域によっての距離的な制約についてどのように勘案するかなど、まだ詳細が確定していないため、7月20日の代表評議委員会において話し合いが行われるというものでした。

共同事業費等の運用変更案については、これまで共同事業費にあった上限を撤廃し、上限を設けずに内容審査制に変更することと、1団体に付き一律の交流費と1回分の通信費が支払われるという内容でした。JOCAの共同事業費等の年間予算が万遍無く支払われていたところから事業内容に応じた支払に変わること、各組織における事務作業の増加や人的資源の差による負担の偏りが懸念されます。JOCAが目指している予算の有効活用が上手く運用されるためには、各組織の地道な必要経費の削減や創意工夫に掛かっていると考えます。

社員総会では、各地域のJOCAの「地域社会の活性化」に

対する取り組みやJOCA中部がちきゅう広場での活動に伴い現在活用されていない名古屋駅近くの雑居ビルの閉鎖を行うこと、JOCA大阪の摂津市への拠点変更に伴う利用者増加と地域社会との繋がり方について、JOCA沖縄の修学旅行プログラム「おきなわ世界塾」についてなど、様々な報告がありました。また、2019年春募集の報告並びに秋募集に向けての取り組み、平成30年度の決算報告がありました。募集事業については、応募総数自体の大幅な減少とその要因が報告されました。青年海外協力隊では”所属先補填の廃止に伴う現職参加の減少”・”応募手続きの煩雑化”・”応募への最後の一押しが弱い”、シニア海外協力隊では”待遇の変更”・”応募区分の変更による混乱”・”募集のキーワードがシニア層の考える「社会貢献」ではなく青年海外協力隊に則した「キャリアアップ」のためギャップを感じさせる”、というものです。応募者の減少は、国内での有効求人倍率の上昇だけでなく、制度改正の影響も大きかったように感じます。秋募集に向けては、Webサイトの変更や「多文化共生環境の推進能力」といった広報メッセージの強化に取り組む方針でした。

3) 大使村まつりについて

6月23日(日)、駒ヶ根駅前の銀座通りで開催されました。夏を感じる暑さの中、地元の人も含めて多くの人が集まりました。今年は、ミクロネシア・パラオ・ブルキナファソ・スリランカ・バングラデシュ・マラウイ・ネパールの7か国の大使館が参加し、派遣前訓練中の候補生たちもブースの出典やステージへの出演を行っていました。



3. 現地活動レポート（派遣中隊員寄稿）

2018-2 古殿 貴大 ウガンダ コミュニティ開発 市川市
 アフリカというと灼熱と赤土の大地をイメージするが、こ
 こウガンダ共和国は琵琶湖の100倍を有するアフリカ最大の
 湖「ビクトリア湖」に面していることもあり水がとても多
 く、アフリカとは信じられないほど緑が多い。

そんなウガンダは JICA のアフリカでの稲作普及の拠点とな
 っており、自分はマユゲ県という県庁の農業部門に所属し、
 稲作の普及活動と農民の収入向上を目標に活動している。

稲作の普及では県庁の同僚と村の農民向けにワークショップ
 を開き、JICA の推奨する病気に強く、収量が多い品種を紹
 介し栽培方法なども教える。ポイントとなるのは田植えの方
 法と、除草。ウガンダでは田植えをする時、日本のようにラ
 インで植えることはなく、高密度にランダムで植えてしまう。
 そのため稲に穂ができる数も少なく、またラインで植えてい
 ないと除草もやりづらいため、ほとんどの農家が除草をやら
 ず、それも収量が少なくなる原因となってしまう。日本の専
 門家がしっかりとデータをとって推奨している方法であるが、
 日本と違い「こうやれば収量が増えるよ」とデータを提示し
 て、ただ言葉で言ってもやってくれない。

さらにやっとやってくれた場合も、水源は完全に天候に頼
 っているため干ばつで稲が枯れたり、逆に洪水で稲が流され
 たり、ネズミの被害や鳥害など問題は多い。



【稲作普及活動の風景】

残り1年3ヶ月、どこまでできるかわからないが、帰国時に
 後悔がないようにしっかりと活動していきたい。

ウガンダの主食は主にマトケ（甘くないバナナ、芋のよう

なもの）、キャッサバ、メイズ、ジャガイモ、コメ。これに豆
 などで作られたソースをかける。グレードがアップしていく
 とそれに野菜が入っていたり、肉が入っていたりする。

ウガンダは内陸国のため魚は淡水魚しかおらず、あまり理
 理で出てくることは少ない。またアフリカならではの「セネ
 ネ」と呼ばれるバッタを揚げたものも売っている、食べた感
 じはエビにとても似ていて、目を瞑って食べたら虫とは気づ
 かない。

交通事情に関して、基本的に移動は「マタツ」と呼ばれる日
 本でいう路線バスみたいなものが主流。大抵が日本のハイエ
 ースに座席を取り付けて改造したものであるが、その中に20
 人以上が押し込まれぎゅうぎゅう詰めの状態になる。その状
 況の中、何時間も止まらずに走るので移動は慣れないとかな
 り疲れる。

不便なことも多いが、なんだかんだウガンダでの生活は楽し
 くやっている。興味のある方は是非ウガンダへ！



【任地、マユゲ県の風景】

2018-2 林 麻里奈 フィリピン 観光 印西市

フィリピンの古き良き田舎の雰囲気が残るシキホール島。
 セブ島、ネグロス島、ボホール島、ミンダナオ島と大きな島々
 に囲まれる1周約80kmの小さな島が、私の任地である。
 手付かずの豊かな自然と島が持つ独特の文化から“黒魔術の島”
 “や火の島”などと呼ばれ、神秘的なイメージが広がり、国内外
 から年間約20万人もの観光客が訪れ、近年訪問者数が増加し
 ている。任地サンファン町は、島南西部に位置し、人口約1
 万4千人、15のバラングイ(自治区)から構成されている。サ
 ンファン町は島内にある6つの町のうち、ビーチ及び宿泊施
 設が最も多く、観光客の半数以上が観光拠点地として利用し

ている。配属先は、サンファン町役場の計画開発事務所である。所属する計画開発事務所は、町の開発計画の策定、モニタリング・評価を実施する町役場の中核的部署であり、観光業の推進も担っている。ボランティアに期待されている活動は、観光を通じた地域経済の活性化である。着任後、ボランティアとして何が出来るか市場調査を行い、特に印象的だったのが、土産物である。観光産業の収益向上として期待される土産物だが、シキホール産のオリジナリティに欠け魅力が少なく、観光客のニーズに合っていない。現在は、町内で土産物を生産する女性支援団体へ定期巡回し、土産物の品質向上、デザインの助言等を行っている。またリゾート施設への販売ルート開拓も同時に行っている。



【活動風景】

ここで、黒魔術師が住むと噂されるシキホール島の噂を紹介したい。冒頭にも記載したが、シキホール島は別名、“黒魔術の島”や“火の島”など呼ばれている。1565年スペイン統治時代にスペイン人がシキホール島を発見した際、対岸の島(ドゥマゲッティ)から見ると不気味な光がちらつく為、恐れられていた。光の正体は、ホタルである。かつて昔は、ホタルの光で島全体が燃えているように見えたことから、“Isla de fuego”(火の島)と呼ばれるようになった。またシキホール島内では、キリスト教と旧来の土着宗教が融合した“魔術”が流行っており、薬草などを調合して呪力を高める多くの魔術師や心霊法師がいたことから、“黒魔術の島”や“魔女の島”として名が残るようになった。また、シキホールには“マナナンガル”と呼ばれる魔女が存在すると噂される。普段は女性の姿をしていて、マナナンガルだと見極めるのは非常に困難である。本人がマナナンガルだと自覚していない場合もある。夕方頃から下半身を切り離し、上半身だけがコウモリのような大きな翼が生え、飛び回る。妊婦の胎児をすすって食べると噂さ

れる。退治方法は、上半身が外出中に、下半身を見つけ、肉の部分に塩、灰、ニンニクを塗り込み、日の出までに上下の身体の結合を防げば、マナナンガルは死ぬ。いかにも黒魔術が住む島らしい噂である。不思議な伝説が多いシキホール島であるが、ゆっくり時が流れるフィリピンの田舎町である。

最後に、シキホール島での、お気に入りのグルメを1つ紹介したい。豊富な海鮮物に恵まれるシキホール島。中でも私のお気に入りは、採れたて新鮮ウニである。目の前の海で採り、サクッと包丁で割りダイレクトに食べるスタイル。塩味のきいたウニは、現地の方もホカホカご飯の上に、これでもかと言うほどウニをふんだんに盛り、豪快に食べるのだ。何と贅沢！海の恵みに日々感謝である。



【現地グルメ】

2018-1 齋藤 一輝 インド コミュニティ開発 市川市

こんにちは。2018年度1次隊、コミュニティ開発隊員としてインドに派遣されている齋藤一輝です。私は昨年の9月から南インド、カルナタカ州の農村部にあるラマナガラという町で生活しており、養蚕(蚕を飼育しその繭から生糸(絹)を作る産業)農家の方々の生活や収入向上を目的として日々活動しています。



皆さんは「インド」に対してどのようなイメージをお持ちでしょうか？多くの方は真っ先に「カレー」をイメージするのではないのでしょうか？

インドで生活していても驚いたことは、日本のカレーと大きく異なることです。インドの話をする上で宗教の話は避けて通れないのですが、人口の80%を占めるヒンドゥー教徒、そして15%を占めるイスラム教徒が豚肉を食べないため、日本で一般的なポークカレーはごく一部の地域を除いて全く見かけません。同様にヒンドゥー教を信仰している方々の半数近くはベジタリアンであると言われており、料理や食材に肉や卵が含まれているかどうか一目で判別できるようになっている点も特徴的です。ちなみに日本にも多くのレストランがある、「インドカレー」もまた現地の一般的なカレーとは異なるようです。特に「ナン」は専用の大きな窯を使って料理しなければ作れないらしく、インド内ではかなりの高級品として認識されています。

またインド内ではカレーという単語があまり通用しないことにも驚きました。一言でカレーといっても国内の地域ごとに味や見た目は大きく異なり、また一食に数種類のカレーを用意するのが一般的なためだと思われます。何より面白いのが、カレーの味付けや食材の違いにはインド文化の多様性が反映されているところです。例えば南インドと北インドでは主食となるものが異なっており、北インドでは小麦、南インドでは米が主に消費されています。それに伴い主菜となるカレーの味付けや材料にも違いが生まれますが、この主菜に関しては主食以上に種類が豊富です。



【南インドのカレー】

インドは国土・人口ともに日本の約10倍近くあり、また州ごとに言語も異なるなど、とにかく多様性の国と言われています。日本では1つの単語、1つの料理として存在している

「カレー」について深く知るだけでも、宗教や歴史的背景に起因する多様性を感じられるのがインドの面白い特徴なのではないでしょうか。

2018-2 長野 峻典 東ティモール 体育 松戸市

東ティモールの首都ディリにある静かでとても賑やかな学校で体育を教えています。私の活動先はろう学校なので生徒は皆ろう者であり教員も半数以上がろう者です。最初は現地語であるテトゥン語も分からず手話もできなかったためコミュニケーションが全く取れず本当に苦労しました。しかし、1年弱活動を続けてきた今では生徒とも手話でコミュニケーションが取れるようになり徐々に活動も形になってきました。現在は体育の授業と部活動として陸上競技やバドミントンの指導を行っています。ティモールは体を動かすことが好きな人が多く特にサッカーとバレーボールが盛んで街中にはコートがいくつもあり子どもたちは暇があればサッカーをしています。しかし、その一方で他のスポーツに触れる機会が少ないため活動先では積極的に様々なスポーツを行い生徒たちの運動の楽しさの幅を広げられるように活動しています。



【活動中の写真】

海と山に囲まれた東ティモールは心の豊かな人が多いように感じます。ティモールにはajuda malu(助け合い)という文化があり優しく平和的な人がとても多いです。この1年間で僕も何度もティモール人に助けてもらいました。文化や生活環境が全く異なる国で生活をしているといろいろと苦労もありますが、生活面でも精神面でも最終的に助けてもらうのはティモール人だと感じます。世界に誇れる観光地はまだありませんがとにかく人の温かさを感じられる本当に良い国です。

これまで活動をして感じたことは日々の小さな活動を地道

に続けることの大切さです。1年間大きな活動(例えば大きな運動会など)はできなかったですが、休まずに同僚や生徒と積極的に会話するよう努めた結果信頼関係を築けたと感じます。これからも生徒と同僚に寄り添いながら地道に活動を続けていき、1人でも多くの生徒の心を動かせるように頑張りたいと思います。



【ディリの好きな景色】

2018-1 野地 祐輔 カメルーン コミュニティ開発 大網白里市

ボンジュール！僕はコミュニティ開発という職種で、カメルーンに派遣されています。カメルーンと活動について紹介させていただきます。

カメルーンは中部アフリカに位置し、国土は日本の約1.2倍、人口は約2300万人です。その大きな特徴は多様性にあり、250を超える民族が共存し、地理は熱帯林に覆われた地帯があれば乾燥地帯もあります。また、宗教はキリスト教やイスラム教、土着宗教が信仰されていて、公用語は仏語と英語です。カメルーンはこの民族、文化、宗教、気候などの多様性から「アフリカのミニチュア」と呼ばれています。

首都ヤウンデから南西へバスで約3時間、沿岸州 エデア市が僕の任地です。季節は大きく雨季と乾季に分かれ、年間を通じて30度前後の気温で、日本の梅雨や夏の時期を過ごしているような感覚です。エデア市の特徴は、町の中心にギニア湾へと注ぐサナガ川が流れていて、この川を利用した水力発電やアルミニウム工場があり、産業の町として栄えています。

僕は初代ボランティアとして、エデア市の保健事務所で母子健康の改善に取り組んでいます。母子健康手帳の普及と理解促進を活動の中心として、医療サービスの改善、地域住民への健康に関する啓発活動などを行っています。

日本で発展した母子手帳は様々な国で普及が進んでいて、その有用性や健康改善に対する期待から、このカメルーンに

も導入されました。カメルーン版の母子手帳の特徴は、英語と仏語の2つの言葉で記載されていることや、わかりやすいようにイメージを多用していること、母子の健康に関する情報がたくさん盛り込まれている点などが挙げられます。

エデア保健地区への母子手帳の導入は初めてだったので、まず無事に導入できるか、そして供給や在庫の管理は上手くいくのか、医療従事者の人たちは十分に活用してくれるか、何よりカメルーンのママたちに役立つのかなどいろいろ不安もありました。しかし、そんな不安は杞憂でした。仕事熱心な同僚たちや各病院のスタッフたちの協力のおかげで、無事に導入ができ、順調に普及が進んでいます。お母さんたちからも好評で、現地の人々に役立っていることを実感します。



【母子手帳に関する話し合い】

活動の折り返し地点を過ぎ、残りの活動期間は1年を切りました。少しでも多くの人たちの健康改善に貢献できるように、残りも全力疾走で活動に取り組みたいです。最後に、この活動を見守り応援してくれている日本の家族や友人たちをはじめ、全ての人たちに深く感謝します。



【子供たちとの交流】

2018-1 川崎 悠 ペルー 観光 鋸南町

¡ HOLA!

ペルーの首都リマ市中心部から南へ約 30 km行った場所にリマ近郊で最大の遺跡、「パチャカマック遺跡」があります。ここは、リマ文化からインカ帝国時代を含め、1500 年以上もの間、ペルー中央海岸部で最も重要な巡礼地でした。

その遺跡に隣接するパチャカマック遺跡博物館で、教育部門に所属し、遺跡保全のため周辺コミュニティへの教育、啓発活動をしています、2018 年度 1 次隊の川崎悠です。

遺跡が住宅と接しているため、住民たちに遺跡の価値を認識してもらい自分たちの歴史、文化に誇りを持ってもらうことが遺跡の保護にはとても重要です。そこで「周辺コミュニティの発展プロジェクト」のもとコミュニティの子供たちとのワークショップ、女性たちによる民芸品職人グループ SISISAN の運営サポート、若者たちによる自転車ツアー BiciTour の情報発信など幅広く活動しています。夏休み期間中には子供たちを博物館に呼んで折り紙ワークショップを行いました。コミュニティの皆さんは日本文化に興味を持ってくれるのでとても嬉しく、やりがいを感じています。

また、観光隊員として、プレヒスパニカの作物の育つ菜園で、プレヒスパニカの農具を用いた菜園体験。現在は修復、保護のため入ることが出来ない、「Templo Pintado」と呼ばれる重要な神殿のバーチャルリアリティー体験。博物館で飼育しているリヤマとのフォトセッションなど、観光客向けのアクティビティも行っています。



【神殿に残されていた壁画のモチーフになった魚や鳥の折り紙を皆で折りました】

ペルーは美食の国として知られているようにとても美味しい料理がたくさんあります。また食材も豊富で、栄養価が高いといわれるスーパーフードもペルー原産のルクマやアグア

イマントをはじめとして、日本では高価なキヌア、チアシード、マカなどもスーパーで安く手に入ります。ペルーの人々は鶏肉が大好きで、誕生日やお祝いの時などは決まって「Pollos a la brasa (ポジョ・ア・ラ・ブラッサ)」（鶏肉の炭火焼き）を食べます。街中にもたくさんのポジェリアと呼ばれる鶏の炭火焼きレストランがあります。また、ペルーは海にも面しているため魚介類も豊富で名物のセビーチェも美味しいです。私の大好物の豆(ひよこ豆、レンズ豆、インゲン豆など)も種類が豊富です。写真は私の一番好きなペルー料理、レンズ豆の煮込みです。ペルーでは週の始めの月曜日は1 週間の幸運を祈ってレンズ豆を食べる習慣があります。ペルーにお越しの際はパチャカマック遺跡博物館まで是非お越しください。お待ちしております。



【2016 年にモダンで広い新博物館がオープンしました】

2018-1 五十嵐 みのり フィジー 青少年活動 八千代市

私は青少年活動の職種で、貧困家庭の子どもたちの教育を支援する NGO で活動しています。すべての子供たちへ教育の機会を与えることを目的とし、主に文具やカバン等通学に必要な物品の配布を行っています。また、村の教会が運営するコミュニティセンターと提携して未就学児を対象に幼児教育も行っています。現在は小学生年代・中学生年代の子供たちのために放課後の時間帯を利用した勉強ができるスペースを作るために奔走中です。その他に、日常の業務ではデータ管理の部署に在籍し、支援申込者のデータ管理業務を担当しています。2 年間の活動目標は「組織の強固な体制の構築」として、対内部に業務の整理等を働きかけ、対外部に広報活動の強化を行っています。時には意見し合いながら、2 名の職員と数名の現地人ボランティアの皆さんと毎日和気あいあいと楽しく活動しています。



【Streetcollection (ストリートコレクション) /街頭募金活動 配属先 NGO は週末に街頭募金活動を行っています!】

フィジーの人口は6割の原住民系(イタウケイ系)と140年ほど前にインドから渡来した4割の移民系(インド系)から構成されています。そのため、街中にはインド料理屋やインド系のブティックが点在しており南の島フィジーにいらながらもキラキラしたインドの文化に触れることができます。両者は話す言語も違い、イタウケイ系がフィジー語を話すことに対し、インド系はヒンディー語とも少し違うフィジーヒンディーと呼ばれる言語を話しています。南の島なんてどこも同じでしょ?と思われがちですが、他のオセアニア諸国とは違うフィジーならではのポイント!と言えば、私はこの両者共お互いに良い作用を与えつつもそれぞれの文化を守る姿勢を推したいと思います。

私はフィジーの首都スバで活動しています。スバで活動する隊員は政府官舎にて2~3名ずつ(同性の隊員)ルームシェアをしています。それぞれの部屋は隣合っていて、近い距離で家族のように暮らしています。性別、年齢、出身地などバックグラウンドが異なる隊員が皆同じところで暮らすことは想像していたよりももっとも難しいことではありましたが、“スバで活動すること”だけを共通項に集った仲間たちと楽しく過ごしています。週末になるとそれぞれ充実した時間を過ごしており、最近、私は隣の部屋の料理の職種で派遣されている隊員に教えてもらいながら料理を頑張っています。これも近くに各分野のプロフェッショナルが住んでいるという協力隊冥利に尽きる幸せです。



【Rakiraki (ラキラキ) 今年のイースター休暇に Rakiraki (ラキラキ) 村にホームステイをして、近くの離島にボートでピクニックに行きました!】

2018-1 工藤 智浩 セネガル 小学校教育 松戸市

Asssalaam malekum! (こんにちは!) 2018年度1次隊でセネガル共和国に派遣されております、工藤 智浩といいます。

私は首都ダカールから車で6時間ほど東に行ったカフリン州という地域で Alassane Dia (私のセネガルネームです(^_^))として、教育委員会に配属されて、小学校教諭として巡回指導を行っております。

セネガルに来て早1年が過ぎました。セネガルには“テランガ”と呼ばれる“お・も・て・な・し”の精神があります。道を歩いていると必ず誘われるお茶。お昼になると誰彼構わず誘い入れるお昼ご飯。街を歩くと初見でも、挨拶から急展開で友達になれる。最近も私も日本人として負けていけないと思い、テランガ返しをして笑い合っています。(笑)

私自身、村出身でもあるのでこのような“街全体が皆家族”のような雰囲気がとても居心地が良く、日々平和に過ごしています。

現在、私の活動は、主に小学校での算数・体育・図工の授業と中学校での英語の授業に入らせていただいています。

皆さんは『セネガルの学校』と聞いてどんなイメージを持ちますか? こちらの小学校も日本と同じ学級担任制。1クラスで50~80人の子供たちが日々勉強しています。算数・仏語・社会・理科・亜語 etc...しかし、教員にとっては人数が多いことで十分な指導が行き届かないことがネックになっています。どこの国でも環境は違えど、教育は難しい。。一方で子供たちは学校が大好き! 相当な病気でない限り、ニコニコしながら登校してきます。

2018-2 渡邊 俊平 マラウイ コンピュータ技術 佐倉市

みなさま、初めまして。2018年2次隊でアフリカのマラウイ共和国に派遣されており、渡邊俊平と申します。職種はコンピュータ技術です。今回縁あって、こちらの青年海外協力隊千葉OB会報に寄稿させていただいております。

マラウイ共和国はアフリカ大陸東南に位置している国で、アフリカ他国と比べると「マイナー」であるかなと思います。実際、私もこうして派遣されるまでは名前すら聞いたことがない国でした。緑が生い茂る雨期があり、朝晩には長袖シャツやダウンジャケットを着こみたくなる冬があり、カラっとした暑さがあると、豊かな気候を持つ国です。いわゆる一般的なアフリカのイメージとは異なるかと思えます。

マラウイの首都リロングウェから高速バスで5時間ほど北上すると、北部最大の都市ムズズがあります。ムズズ中心部からシェアタクシーで10分ほど移動すると、ムズズ職業訓練校がありまして、私はそのICTコースの教員として活動しています。このコースはICTサポートの資格取得を目指すもので、コンピュータの基礎、ネットワークの基礎、ハードウェア修理、カスタマーサポートなどの授業が行われています。マラウイ北部ではトゥンプカ語が話されているのですが、授業は英語で行われます。



【この問題ムスカシ...】

そんな我が町でも昨年度、運動会を実施しました。当初は、“そもそも運動会とは何ぞや”“別に体育をそんなにやる必要はない”など実施に至るまで難しい点は多々ありました。しかし、配属先の方や先生方の協力を少しずつ借りながら練習を重ね、無事に運動会を敢行出来ました。当日は子供たちや先生方だけでなく、近所の方々も応援に来て下さり、『Alassane が頑張っているんだもん、来ちゃったよ!』とってもらったことが本当に嬉しかったです。そして視察に来た配属先の同僚からも良い評価を頂き、来年度により大きな規模で運動会を行う計画が始動しました。そのためには自分自身だけでなく、今回協力していただいた先生方や配属先の方々、街の人と更なる協同をしながら臨んでいこうと思えます。どんなに良いアイデアを持って来ても、結局は現地の人が一番だなあと感じると共に、学ばせて頂いた分、彼らにも何か伝えて残していかなければいけないと自分が来た意味を感じた1年目でした。これから2年目に突入していきますが、次は自分が羽ばたけるような年にしていこうと思えます。



【授業でグループワークを行った際の写真】

基本的に生徒たちは英語を話せるということになっているのですが、やはり一人一人レベル差があります。英語で授業をしていても、私もネイティブではない、相手もネイティブではないということで、100%通じ合った授業や会話ということはなかなかできないのが現実です。また、コンピュータを持っている子が少数、停電が発生する、教科書がないなどの問題で、やりたい授業ができない・授業がスムーズに進まないといったことも多くあります。またムズズは外国人が比



【はじめてのUNDOKAI!!】

較的多くいる都市部であるとはいえ、街中や学校を歩いていると目立ちます。今は慣れましたが、活動初期にはやはり気になったものでした。

それでもこれまで一年弱の間活動を続けることができたのは、周囲の人々が理解をもって受け入れてくれたことと、生徒たちが自分の授業を喜んでくれることを励みにできたからだと思います。拙い英語であっても理解しようとしてくれ、自分の授業を真剣に受講してくれます。シャイな子が多いですが、それでも質問しに来てくれたり笑顔を見せてくれたりすると、こちらに来てよかったなと感じます。

残りの活動期間は一年ほどと、あっという間に時間が経ってしまいました。日本に帰る際に悔いが残らないよう、これからも頑張っていきたいと思います。



【PCルーム。

先輩隊員の方々が残してくれたものも多いです】

2018-1 宮森 大輔 マダガスカル コミュニティ開発 流山市

2018年度1次隊で2018年7月にマダガスカルへ赴任し、コミュニティ開発の隊員として活動しております宮森と申します。

マダガスカルと言えば、星の王子さまにも登場する「バオバブの木」や2足で横跳びをするキツネザルの「シファカ」など豊かな自然の中に沢山の見どころがあります。多様な生物が生息し、その多様性の高さは世界でも上位に入り、マダガスカルで発見されている約20万種の内、約15万種がマダガスカルでしか見る事のできない固有種であるといわれています。豊かな自然は長い年月を経て生成された事を感じさせ、世界遺産に登録されている「ツィンギ自然保護区」では石灰

岩が数万年かけて浸食され、針山のように先の尖った岩群が長く続く独特な景観を楽しむことができます。約1500年前に、この自然豊かな無人島に人々が移り住み始めたと言われており、今では、単一の島国でありながら多様な人々が交じり合い、一言では表せないマダガスカルの文化が形成され、各地域で異なる顔立ちを見せ、暮らせば暮らすほどに、マダガスカルの奥深さを知ることができ魅了されていく毎日です。



【一面緑の豊かな自然風景】

私の任地は、首都から見て北東に位置しバスで10時間ほど移動した場所にあります。都市部とは一線を画した農村に該当し、電気や水道が通っておらずインターネットが使えない事も日常茶飯事です。この土地においても豊かな自然や移り変わる季節の風景を日々楽しむ事ができます。雨季になると、活動で各地へ足を運ぶ際は今まで何でもなかった場所に徐々に水が溜まっていき、あちこちに川ができ始めて移動するだけでも苦労します。ただ、移動の途中で足を止めると、一面緑に覆われた田園風景が広がり、時にはどこまでも続く大地に空との境目を見失ってしまうような光景に目を奪われ、大自然の豊かさに感慨深くなってしまうのも、この農村地帯での楽しみでもあります。活動では、農村地帯で貨幣経済が未発達な中、首都や大都市をターゲットに農村で野菜や手工芸品など市場志向型の商品を生産し、地域農民の収入向上を図っていく事ができるように活動に取り組んでおります。自然を楽しみつつ、村人の方々の収入向上に向けて活動を行っていく事ができるように、これからも頑張っていきたいと思っています。



【今まで何ともない道だった場所にできた川】

の土地が誰かの私有地であり、そこを歩くときは葉っぱを手に持って歩くことになっています。葉っぱを持つことで、怪しいものではないことを知らせます。また、何人かで一緒に歩く時は1列になって歩くのもマナーです。ピシッと列を揃えているのを見かけると、ヤップ人の礼儀正しさを感じます。小さいけれど、伝統が今も守られていて、魅力がいっぱいです。



【ヤップデーでの伝統的な踊り】

2018-1 佐々木 麻弥 ミクロネシア 小学校教育 柏市

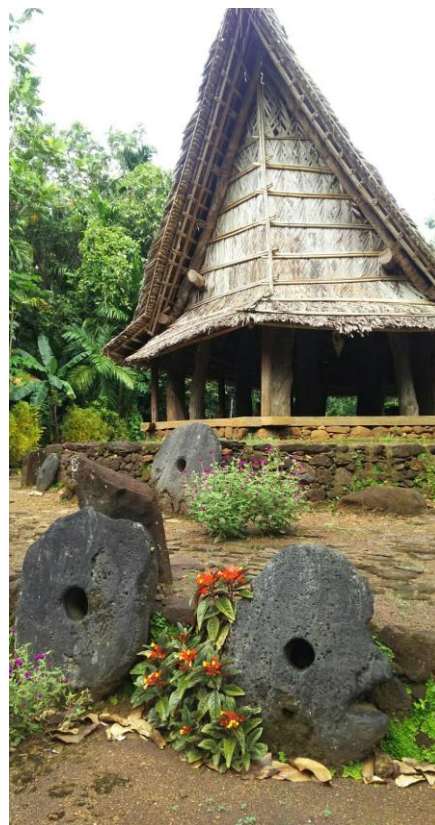
4つの国の文化が色濃く残るミクロネシア

私の任地はミクロネシア連邦の西端に位置するヤップ島です。ミクロネシアはもともと違う国であったポンペイ、チューク、コスラエ、ヤップが1つのミクロネシアという国になりました。けれども、今でもそれぞれの独自の文化が色濃く残っており、別の国なのではないかと感じる場面が多いです。それぞれの州では違う言葉が使われており、国の会議は英語で行われるそうです。ミクロネシア独自の共通語がないのは何だか寂しいような気もします。

私の配属先はヤップの中心部にある小学校で、児童の算数能力向上と先生の指導力向上を目指して活動しています。私の学校にはヤップ出身の子や他の島出身の子もいます。基本的な使用言語は英語とヤップ語になりますが、両方の言葉がわかる子、一方しかわからない子、どちらもわからない子がいるので、なかなか指示が通らないこともあります。

ここからはヤップの文化の話をしていきます。ミクロネシアの中で特に伝統文化が特に色濃く残る島がヤップだといわれています。年に一度ヤップデーというお祭りも残っていて、伝統的な衣装を身につけて踊ったり、ココナッツわりなどの競技もあります。伝統的な衣装はカラフルな腰みのスカートを巻き、上裸で首からは葉っぱなどでできた首飾りのようなものをさげます。上裸でもその首飾りが洋服のような役割をしているので、首飾りも含めて正装になります。また、ストーンマネーとよばれる大きな石も至るところで目にすることができます。

昔の家が残っていたり伝統の踊りがあったり、生活の中でも伝統を感じることもよくあります。おもしろいのは、ほとんど



【伝統的なお家とストーンマネー】

2018-2 永井 寛朗 ザンビア PCインストラクター 佐倉市

はじめまして、アフリカ南部に位置する「ザンビア」という国に派遣されており、永井と申します。活動としましては、日本で言う中学2年生から高校3年生が在籍しているセカンダリースクールに情報科教員として赴任されています。

ザンビアでは3年前よりコンピュータの授業が必修化されましたが、パソコンなどの設備はまだ導入段階にあります。その中で、より良い授業実践、教育効果・学力の向上、コンピュータ室の維持管理・有効活用化等を目指し、日々活動に取り組んでいます。



【授業中の様子】

ザンビアは四方を陸で囲まれている内陸国になりますので、島国である日本とは全く異なる風土を有しております。国土面積は日本の2倍にもなりますが、人口は8分の1と広大な土地を有し、世界有数の銅産出国(日本の10円玉もザンビアの銅から出来ています)となっておりますが、それに頼るモノカルチャー政策を進めてきたため、経済はなかなか安定せず、まだまだ発展途上にある国であります。しかしながら、首都のルサカでは通勤時間帯には大渋滞で動けなくなるほど乗用車も増え、ショッピングモールが立ち並び等、近年目覚ましい発展を遂げております。そちらからは1日半以上かかる東側のマラウイ国境沿いにある地域にて活動に当たっておりますので、電気と水道もまだまだ安定しない環境で生活を送っています。その中でも何故かスマホの電波は4Gで繋がる等といった、インフラ整備が逆転している状況も、現代らしいポイントなのかもしれません。

主食は「シマ」と言われるメイズ(甘くないトウモロコシ)の粉をお湯で溶かして練ったものになります。これを手で捏ねながら、付け合わせのお肉や野菜、スープと合わせて食べます。アフリカでは広く主食として食べられており、「ウガリ」と聞いたら御存知の方もいらっしゃるかもしれません。味のバランスとしては、お米と似ているような感覚で、おかずの味を引き立てる味わいとなっています。

また、これまで教員の傍らダンサーとしても活動してきた経験から、ダンスクラブを立ち上げ、日本で生まれたストリートダンスを子ども達に教えています。アフリカは文化として

生活の中にダンスが溶け込んでいるため参加率も大変良く、毎回みんなで楽しんで踊っております。そちらの様子や、日頃の活動等をインスタグラム(アカウント:chibahiro0514)やその他SNS(Facebook、Twitter)にて発信しているのでご覧頂ければ幸いです。



【主食「シマ」】

2018-2 田中 上葉 ベナン 野菜栽培 野田市

野菜栽培隊員としてベナン共和国に派遣しています。活動目標を2項目に分けて計画しました。生産技術改善と収量向上の貢献、農業を通じた栄養改善です。生産技術改善と収量向上の貢献では、農家さんは農業の知識をすでに持っていると感じました。しかし、間引きや移植を行わないこと、育苗していても苗の生育が十分でなく、定植は苗が小さい状態の時にやるなど、栽培に対して手間や技術を施していないことが問題であると思いました。生育期間も手間をかけていくことで収量は向上するため、改善していきたいです。農業を通じた栄養改善では、人々は食事の量に対し、栄養面では偏っていると思い、モリンガを普及していきたいと考えました。モリンガの一番の魅力は、葉や花、果実、種子のほとんどの部分を食べることができミラクルツリーと呼ばれているほど、栄養価が高いことです。また、モリンガはベナンでも既に存在し、乾燥に強く成長が早い、種子からでも挿し木からでも栽培が可能。そのモリンガをまずは、家庭や学校での普及を目指しています。活動に対して意欲が湧かなくなってしまうことも正直あります。しかし、思いがけないところで協力者に会い、地道に活動を続けていて良かったと報われる瞬間もあります。限られた任期の中で少しでも成果を残したいと思います。



【モリンガの普及を行うために、育苗をしている段階です。

たくさんのベナンの人々に協力をしてもらいました。恩返しという意味もこめて、この活動を成功させることができればいいなと思っています。】

人々の主食は、パットというトウモロコシの粉を水と混ぜ加熱しながら練りあげたものをよく口にしています。それに野菜、お肉や魚を選び、トマトソースと一緒に食べられています。パットには一番ポピュラーな白いパットの他に、赤・黒のパットがあります。私は、現地の人と同じ食事を摂るといふ行為は、ベナンの人々と仲良くなれるコミュニケーションの手段だと思っています。同じ空間で、同じものを食べてリアクションをとることで、少しでも彼らにベナンの文化を受け入れていると伝わっていて欲しいと思っています。

高校生の頃から少しずつ国際協力に興味を持ち始めました。高校生の時の恩師がきっかけです。世界でたくさん問題が発生している中で、世界の貧困と、それによって起きる途上国の飢餓問題とアフリカに関心を持つようになりました。日本で生活している中で、栄養失調などにより命を落としていく状況、食糧を十分に摂れない状況は、正直身近ではない問題ですが、世界では大問題となっています。世界の食料生産総量は、世界中の人々を養う十分な量があると言われていますが、未だに飢餓で苦しむ人たちが減っていないのが世界の現状です。帰国後は、世界における飢餓問題を解決していきたいと考えているため、国際協力分野関係の仕事に携わりたいと考えています。あるいは、種苗会社にて、どこの土地でも栽培することが可能になるような、栄養が豊富で乾燥や水不足そして病気に強く、一回の収穫量が多く丈夫な種の研究

などにも従事してみたいです。



【私の協力者は、WFPの職員でこれからの農業を通じた栄養改善の際と一緒に活動をしていこうと計画をしています。この写真は、彼の活動で普及先として決めた学校で、子供たちに食事を提供していると聞いたので、モリンガを実際に持って行き、モリンガソースを作り子供たちに食べてもらった時のものです。】

2018-2 高瀬 紬 パラオ 体育 佐倉市

私の配属先はパラオの中でも栄えているコロール州の州政府です。州政府の管轄下にあるフィットネスジムにて、ジム利用者へのサポートを行うこと、トレーニングメニューを作成し提供すること、そしてジムスタッフの育成を目的とし、肥満大国と呼ばれているパラオに派遣されました。ジムでの活動内容はトレーニングマシンの利用法の案内、ジム内の清掃活動、トレーニングメニュー提供やポスターの作成といった活動をしています。

また、教育省と連携し、小学校の放課後プログラムに運動する時間を設けて、現地スタッフに向けた運動指導のワークショップを行いました。放課後プログラムでは、学校で行う体育の授業内容とは異なり、レクリエーションも交えながら身体を楽しく動かしてもらえるような運動を実施しています。他にも高齢者施設や政府機関でのエクササイズ、スイミングスクールの補助をしています。

なぜパラオは肥満大国なのか。それは、パラオの住民のほとんどが車を利用し、街中を歩くのは観光客ばかりであり、街中をパラオ人が歩く姿は非常に少ないこと。街の広場にあるベンチに腰掛け休憩している住民たちが多くいること。そ

してパラオ人のホストファミリーと日常生活を共にしてわかった事として、食事は、肉か魚、そして米かタロ芋がメインで、野菜不足を痛感する。野菜や果物は新鮮なものが少なく、値段も安くない、(野菜や果物のほとんどが輸入に頼っている。)インスタントや缶詰の食料が安く手に入り、若者は特にそれらを好んで食べている事。その為、パラオ人の体型はお腹が丸く張っており、体脂肪の他、内臓脂肪も多く肥満体型である。そして嗜好品であるビールナッツの影響でガンの発生率も高い。日常生活から見ても生活習慣病のリスクを背負っている人が多く、この国の問題になっている。しかし、大きな問題はほとんどの国民が危機感を抱いていないという事。しかし、近年パラオ人の YOGA インストラクターの YOGA 教室、ZUMBA 教室が開かれている。また、ランニングイベントも開催されている。そしてジムの利用人数も上昇傾向にある。この事からも、少しずつですが健康志向が向上しているのだと感じる。人口2万人の小さな島国パラオ国民のみみんなが笑顔で健やかな生活を過ごせるように小さな手助けを積み重ねていき、活動を続けたい。



【「ランニングイベントに参加！集合時間は朝の5時！」

パラオは年間を通して温暖な気候であり、日中にランニングイベントを行うと暑すぎる！！そのため、太陽が昇らない時間帯からイベントがスタートする。朝日とともにランナーたちがゴールするのがパラオ流である。】

パラオの街中を歩いていると「ニホンジンデスカ？」と声を掛けられ、返事をすると「コンニチハ、アリガトウゴザイマス。」と言って笑顔で手を振ってくれる。パラオ人のほとんどは日本のこと、JICA のことを知っている。JICA ボランティアであることを伝えると感謝の気持ちを伝えてくれる。このことから親日国だと実感する事がとても多い。また、パラオ人の中には、年配の方々だけでなく、子どもにもマコミ、

アキコ、タダオ、タロウといった日本人の名前を持つ人が多くいる。日本との関わりが深いパラオ。日本人で良かったと感じる反面、日本人として、恥ずべき行動をしないよう気を引き締めていこうと感じた。



【「ベラウフェアでのパラワンガールとの一枚」

ベラウ(=パラオ)のお祭りにて民族衣装を着た子どもたちに出会った為、記念撮影。この衣装は身体がふくよかな女の子が似合うと言われている。】

2018-1 榎山 万葉 ウガンダ コミュニティ開発 船橋市

Muli mutya, bassebo ni banyabo?(現地語・ソガ語で「みなさんいかがお過ごしでしょうか?」の意) 青年海外協力隊、ウガンダ共和国のマユゲ県派遣の榎山万葉と申します。この記事が皆さんのお手元に届くころには、ウガンダに来てから1年と1ヶ月が経過します。残る11ヶ月、自分のできることを住民と協力して進めていきたいと思えます。

私はウガンダ共和国にコミュニティ開発隊員として、首都のカンパラから東へ車で4時間程の距離に位置するマユゲ県の県庁に派遣されています。要請内容は、水の防衛隊として地域の井戸周辺環境の改善や衛生啓発活動が主となります。ただ、マユゲ県での水質検査や井戸の状態を視察した際には特に大きな問題を抱えているわけでもなく、各コミュニティの井戸管理組合も比較的機能しているということがわかりました。そこで、管理状況の改善ではなく管理の質を向上する意味で問題分析手法をコミュニティリーダーに教授する方向で活動を展開しています。PCM(Project Cycle Management - 問題分析手法の一種)を取り扱うことでコミュニティリーダーがファシリテーターとして住民に問題意識を持たせ、住民主体で問題を解決する方法を模索してもらうことを目的としています。現状としては、井戸を保護するための塀を建てることを目標とした収入向上活動が案として挙がっています。こ

の案は地域住民への環境教育を含めた内容となっており、地域にポイ捨てされてしまっている自動車用のタイヤを集めサンダルやバッグを作成し販売して利益を得る、という流れになります。住民の環境意識向上と収入向上を行うことで、自分達の生活環境を少しずつ改善していくことを期待したものです。



また、小学校での歯磨きに関するレクチャーも実施しています。マユゲ県内の小学生の約7割が家庭の経済状況が理由で歯ブラシと歯磨き粉を持っておらず、代用品として木の棒を使って歯磨きをしています。私達日本人は1日に3回ほど歯を磨きますが、ウガンダでは1日の中でも起床時の1回のみしか磨かないというケースがよく見受けられます。歯ブラシや歯磨き粉を入手することが困難だとしても歯磨きの回数は増やすことができるため、毎食後に歯磨きをしてもらい自分自身で歯周病などを防いでもらうための啓発活動に取り組んでいます。

1年目が終わる頃に活動の基盤が構築され始めたのでスタートダッシュは遅れてしまいましたが、2年目で住民と共に取り組み質の高い活動を展開したいと思います。



2018-1 窪田 尚美 スリランカ 小学校教育 千葉県

私の任地は、スリランカの北部州、ワウニアです。大都市コロンボからバスで7時間、タミル人が多く住む地域です。北部州は、長年の紛争により、経済・社会開発が遅れており、日本を含む各国から復興支援が進められています。私は、教育事務所に配属になり、地域の小学校を巡回して学校環境の改善や算数の指導法をアドバイスしています。小学校では、先生の話聞くことが中心となっているので、児童が活動する時間を増やし楽しく学校生活を送れることを目標としています。そのため、他地域のボランティアと協力して、教員養成校でセミナーを開催したり、児童に向けてワークショップをしたりして現地の人と共に考える機会を設けました。百ます計算や折り紙は人気があり、指導に取り入れている学校が増えてきています。配属先や先生の正装がサリーという伝統衣装なので、学校巡回をするときは、サリーを着て自転車を漕いでいます。暑い中、片道1時間ほど走るので大変でしたが、サリーを着た日本人と有名になり、親しみを込めて話しかけられたことはとても嬉しかったです。お互いの文化を尊重することは、国際理解の第一歩です。



【隊員で行った教員向けのセミナーの様子】

代表的な食べ物カレーです。朝昼晩、異なる具材のカレーを食べています。豆や鶏肉のカレーは日本人の舌によく合い、おいしいです。1日に数回、砂糖たっぷりのミルクティーを飲みます。茶葉から抽出した後、全脂粉乳を入れて空気を含ませて飲みやすい温度に下げます。香りの良いセイロンティーです。暑い気候の中、スタミナがつかます。また、空中宮殿と呼ばれるシーギリヤロックや車窓から世界有数の絶景が見られる紅茶列車も魅力的な観光地です。アーユルヴェーダで訪れる人も多く、自然豊かな「聖なる光り輝く島」です。人々はとても親切で、目があうとにこっと笑いかけられるこ

とも多いです。日本人をととても快く受け入れてくれます。

2019年4月にスリランカで同時爆発事件が生じ、多数の犠牲者がでました。協力隊は日本に一時帰国となり、継続しての活動が困難になり、任国がアフリカのマラウイに変更となりました。スリランカの生活にも慣れ、これからより深く関わっていきたいと思っていた時だったので、とても残念な気持ちです。しかし、マラウイでもスリランカの経験を生かして、現地の人たちと共に楽しく活動していきたいと思います。

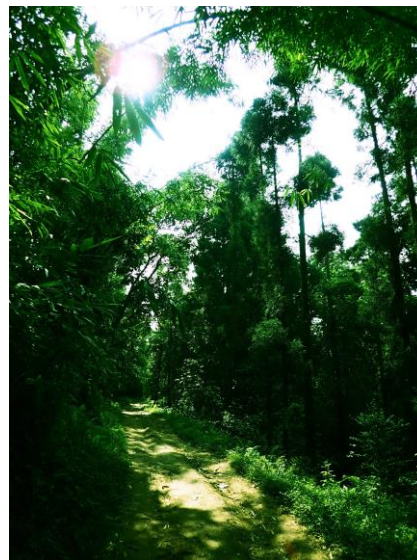


【成人のお祝いのセレモニーの様子】

2018-1 森川 万里 ネパール コミュニティ開発 野田市

カトマンズからタライ平野に南下して、そこから東へ約9時間。果てしなく続くタライ平野を走り抜けた先にある、インド国境に程近い街から再び丘陵地帯を北上すること3時間。斜面に広がる段々の茶畑が幾度か霧に包まれた後、車はようやくイラムの町に辿り着きます。標高約1,200m、古くからライ・リンブーと呼ばれる人々が暮らし、現在は様々な民族が緩やかに混ざり合う、東部丘陵地域イラム郡の郡都であり景勝地。穏やかで冷涼な気候と雨季の霧は茶葉に豊かな風味をもたらす、茶葉の名産地としてイラムの名をネパール中に知らしめています。

その市街地から緩やかな山道を歩くこと30分、オラレ・バルドゥンガ共有林と呼ばれる小さな林地の観光開発が、私の現在の活動の中心です。地域の生活資源を賄うには余りにも小さなその森には、その名の由来とも言えるバル・ドゥンガ（熊の岩）が座し、地域の人々にとっては憩いの場、旅行者にとっては旅先の小さな寄り道として親しまれてきました。



【オラレ・バルドゥンガに行く】

その本格的な観光開発が提起されたのが昨年の秋口。地域の有志団体と森林事務所の間に立ちながら、地域と行政を繋ぎ、開発の在り方を模索する日々。形の見える活動ではなく、ボランティアの存在なしには進まない計画というわけでもない。ただ、自分にとって、そして地域にとって少しでも良いと思える方向と方法を模索し、その“良さ”を出来るだけ多くの人と共有すること。それくらいが、私の活動の在り方としては丁度良く思っています。

計画に直接関わる人々の多くは、環境保全の大切さも、持続可能な開発の必要性も“知って”います。言えば頷き、“当然そうすべきだろう”と口を揃えて肯きます。しかしそこから先、“そうする”と言い、実際にそうすることは中々に難しいのが実際のところ。その一歩目を踏み出す人達と最初の足の置き場を一緒に探せたのなら、この曖昧な活動も、きっとまあ、何かの意味を持つのでしょう。

一年目を迎え、緩慢な進展と穏やかな停滞の狭間で季節はもう一巡。現在、活動は忍耐と諦観と、自律と期待と共に。日々は順応と倦怠と、ささやかな発見と共に。そして残る一年、まずは安全と、願わくば僅かばかりなりとも前進と共に。



【もつれた話し合いの果て】

2018-1 長澤 沙希 カメルーン 小学校教育 四街道市

「顔だけなんか白いね。」最近カメルーン人に言われた言葉だ。ほぼ毎日外で体育の授業。日本から持ってきたファンデーションの色が合わなくなるほど、腕はこんがりと日焼けをしている。しかし、子どもたちに握られた手と比べてみると、まだまだかなわない。もう少し近づきたい。肌の色だけではなく、心の距離も。

カメルーンへ来て、約一年が経過した。気候や文化、言語等、何もかもが違うカメルーンで生活していくことができるのだろうかと不安だった昨年6月下旬。その気持ちが今では、やりがいと楽しさ変わった。停電や断水、決まった時間に始まらない会議、とにかく長いお祭り等、カメルーンの日常はわたしにとっては非日常であり、とても興味深く面白い。食事とてもおいしく、今では仲の良い家族と一緒に家庭料理を一緒に作ったりもする。カメルーンの料理は、日本の料理と似ていて出汁をとる文化がある。それも、ここへ来なければ知ることのできなかったことである。このような、貴重な体験をさせてもらえることに感謝している。



【コキ（豆をつぶして練り蒸したもの）とよばれるカメルーン西部州の郷土料理です。バナナの葉にコキを包んで蒸します。あたたかいうちに食べるとカボチャプリンのような味がします。】

活動は、情操教育と呼ばれる、体育や図工、音楽を小学生の子どもたちに教えている。能力はあるが経験が少ない印象だったが、この一年で少しずつ変化しているように思う。活動開始当初は、子どもたちは何が得意で、どんな活動に興味を持つかがわからなかったため、とにかく何でもやらせてみよう様々なアクティビティをこれでもかとたくさん行った。すると、子どもたちは、どんな活動も楽しそうに取り組んでくれた。体を前のめりにして、目を輝かせて、活動に全

力で挑戦する姿を見て、心が温かくなった。そして、わたしのできることをできるだけやろうと動くと、現地の先生方は、「わたしもやってみてみたいから、今回はそれを教えて。」と声をかけてくれたりもした。もちろん、とにかく何でもやろうと試みた結果、失敗もたくさんあった。しかし、得るものの方が確実に多かったと思う。



【子どもたちと図工をやりました。ステンシル（スタンプ遊び）色づかいがとてもきれいです。】

わたしは現職参加制度を利用しての参加なので、新学期開始から半年で任地を離れることになる。カメルーン人にはなれないが、彼らの目線に立って考え方に寄り添い、この国のいいところを残しつつ、新しいことにも一緒に挑戦していきたい。そして、カメルーンに少しでも自分がいた証を残せるよう、今後も尽力していきたい。

2018-1 西田 いずみ マレーシア 障害児・者支援 千葉市

私は2018年1次隊、障害児・者支援としてマレーシアに派遣されている西田いずみです。

活動としては、マレーシア北部に位置するクダ州クアラヌランという地域で、教育事務所に籍を置きながら、任地の小・中高等学校の特別支援学級へ巡回指導をしています。

赴任してから1年がたち、今は小学校、中高等学校計2校での巡回指導を終えたところです。小学校では音楽や体育を中心に日本の仕組みやアイデアを紹介したり、授業のお手伝いをしたりしました。たまに日本文化の紹介もかねて折り紙を教えたりもしました。中高等学校では、入院した先生の代わりにその先生が担当していた授業を教えていました。マレー語や、日常生活の指導、理科社会の教科が組み合わせられたような教科、微細粗大運動（手や指を使った細かい動きの運

動や、全身を使って大きく動く運動)という日本にはない教科などもありましたが、特別支援学級用に教科書が各教科そろっていることはすごいなと感じました。教科書にQRコードが付いているページがあり、携帯電話でそれを読み取ると参考ページまで飛ぶこともできてハイテクな感じにびっくりしました。生徒も先生もみな明るく楽しく優しいので、毎日楽しく学校で活動することができています。ほとんどの生徒や先生がイスラム教徒なので、大人の女の人はトゥドンという被り物を被っています。私もそれを真似てトゥドンを1つ持って被っていたら、たくさんの先生が私にトゥドンをプレゼントしてくれて、今では10枚以上になりました。色やデザインも様々でかわいく、毎朝髪型の心配もなくていいのでとても重宝しています。



【独立記念日コマ】

ちょうど1年前の今頃マレーシアに降り立った時は、首都のきらびやかで高層ビルの立ち並ぶ姿に驚いたことを覚えています。首都には日本のお店も多くあり、IKEAやSOGO、一風堂にAEON、ダイソーなど故郷の千葉にもなじみのあるお店が多く、安心感を覚えたことを思い出します。1か月間の現地語学訓練を経て、いざ任地へという赴任直前にデング熱にかかりました。その時は頭が割れるように痛くて死ぬんじゃないかと思いましたが無事に快復しました。2週間入院したこ

4. 今後の活動予定

1) グローバルフェスタについて

本年9月28~29日(土日)の両日、お台場にて「グローバルフェスタ」が開催されます。このイベントは国際協力活動を行う政府機関やNGO、企業、それに各国大使館等が一

とも今となってはいい経験だったと思うことができます。

首都から任地の州都までは飛行機で1時間、車だと6~7時間と離れていて、さらに私の任地は州都からバスで1時間ほどのところにあります。州都よりも隣国タイの南部の方が近いくらいで、近所の方は週末や散髪のためにタイに行く人もいてびっくりです。タイに近いのでタイ料理も多くあり、私が今はまっているのはクィティアオトムヤムです。米からできた平たい麺をトムヤムスープで食べます。マレーシアは麺の種類が豊富で(ビーフン、ミー、クィティアオ)、塩コショウラーメンのようなミーハイラン、チャーハンのようなナシゴレン、オムライスのようなナシパタヤといった、日本人の舌に合うと思う料理が多く、またフルーツは日本より安くおいしいです。この間は同僚の先生に連れられてフルーツ狩りに行きました。ランブータンやマンゴスチン、コドン、ドリアンもたくさん食べられました。

皆さんもぜひ、食べ物がおいしく、人が優しいマレーシアに一度お越しになられてはいかがでしょうか？



【室内でできる体育遊びの提案】

に会する国内最大級のイベントです。

協力隊関係は各県OB会や各国OB会、各職種OB会など多数出展して会場を盛り上げています。出展しているNGOやNPOの中には協力隊OBOGが立ち上げた団体や参画してい

る団体もたくさんあります。

もちろん当会も出展しており、毎年趣向を凝らした内容で、この数年は中南米の食べ物や飲み物を多く提供して、それなりの売り上げを確保しています。OB 会関係のブースが立ち並び通りは民族衣装を着た OBOG が多く、異国感満載で会場を賑わせています。任国のビールや食品、民芸品などの販売も行っており、一種同窓会の場ともなっているようです。

今年も当会を出展しますので、ご都合のつく方は是非ともご協力をお願いします。ホームページで協力者募集のご案内をしていますので、1 日でも半日でもご協力ください。よろしくをお願いします。

2) 新隊員派遣壮行会、帰国隊員慰労会について

新隊員として派遣される前には「県庁表敬」があったことは皆さんの記憶にあると思いますが、当会では現在県庁表敬後に「新隊員派遣壮行会と帰国隊員慰労会」を千葉県海外協力隊を育てる会と共催で開催しています。2 年ほど前までは新隊員派遣壮行会だけだったのですが、帰国隊員も新隊員と一緒に県庁表敬をするようになって以来、帰国隊員慰労会も同時開催しています。県庁表敬は通常平日のお昼前に実施され

ますから、新隊員派遣壮行会・帰国隊員慰労会は昼食会として特製お弁当を食べながらアルコール抜きの会合となっています。数年前までは県庁表敬が午後 3 時くらいからのスタートでしたので、アルコールを飲むには少し時間的には早いのですが、県庁に近いホテルの 1 階レストランにて飲み放題で開催していました。

長い歴史のある会合ですが、一番の悩みは OB 会からの参加者が少ないことです。平日のお昼ですから、現役世代が参加する場合、休暇を取ってくるしか方法はありません。勢い当会の参加者はシニア世代に限られるわけですが、それでも毎回 1~2 名の参加にとどまっており、可能であれば現役世代にも参加していただきたいものです。

2019 年度からの隊員派遣は年 3 回となり、県庁表敬は 2 次隊が 11 月下旬から 12 月初旬、3 次隊は 3 月下旬になりそうです。壮行会等は県庁表敬終了後に開催しますので、ご都合のつく OBOG は是非ともご参加ください。会費は 2,000 円です。当会のホームページに掲載の日時を掲載しますのでご確認ください。新隊員に激励のお話をしてもよし、隊員時代の経験をお話してもよし、場を盛り上げていただければありがたいです。

5. 編集後記

令和になってから初の会報、いかがでしたでしょうか？派遣中の隊員の方々が任国で悩みながら、考えながら活動している様子が垣間見えてきます。自分が活動していた時に、寄稿の連絡を貰うことで、活動中の自分が写っている写真がほとんど無いことに気が付かされたことを思い出しました。

年に 2 回ですが会報という形で国際協力事業に関わるというのは、日本で働き始めても海外と心の距離を作らないために、なかなか良い機会だと感じました。

(H27-3 ウズベキスタン共和国 PC インストラクター 高石 千絵)

～お知らせ～

ホームページのご紹介

当会ホームページにて、定例会／協力隊ナビ／講演会／懇親会等、各種イベントのスケジュールや、活動報告を掲載しています。URL は下記ですが、「青年海外協力隊千葉 OB 会」で検索していただくことでもアクセスできますので、是非ともご覧ください。

青年海外協力隊 千葉 OB 会 ホームページ：<http://www.jocvchiba.net/>

メーリングリスト／Facebook グループのご案内

上記ホームページにて、当会のメーリングリストと Facebook グループへの参加をご案内しております。是非ご参加ください。

連絡先 お問い合わせや会報への寄稿は info@jocvchiba.net までお願いします。